

『明大学費闘争資料集』

はじめに

「私の手元に集まつた学費闘争についての資料、特に伊藤英雄君から提供を受けた当時の『アジビラ』をメインとした『資料集』を、みんなに協力をねがいた私の責任として、作成したい」と思っています」と「M66」の会報（No.10）で約束しながら、これまで責任をはだしてきました。このままズルズルと先延ばししていると、無責任男と呼ばれそうですので、漸く重い腰をあけることになりました。

実は「情況」（1・2月号）に、「破天荒な人々」の書評（？）のかたちをとつて、「2・2協定の真相に迫る」なる文章を書きました。その勢いで「資料集」の作成もと思っていたのですが、義母の介護の問題等で気持と時間が割かれ、加えて例年の花粉症が続き、それどころではなくなりました。しかし4月に入り、花粉症も治まり、介護問題にも一応のメドがたち、漸く「資料集」の作成に取りかかることができるようになりました。何時までもダチダチと言わずに、スッキリとして過暦を迎えるかと思つています。

I 作成の経緯

2003年10月、宮崎先生が「雪乱れ飛ぶ」明大学紛争」を上梓されました。「日大紛争や、東大紛争については、それなりの評価や記録も出版され、社会的に関心も持たれたようですが、明大紛争については、全く忘れ去られようとしています。私たちが情熱を傾け、立場はそれぞれに異なつても、より良い解決を目指して青春の一時期を昇華させた明大紛争を、ただ忘却の彼方に押しありしまつるのは、いかにも残念です。後進に実感を伝えて、大学や社会への警鐘の一助に、その記録を残そうかとおもつていてます」との宮崎先生の「想

い」が込められた労作です。「学生部長は職制上、大学の機関ではあるが、学生を真に守る『護民官』として行動しようと心誓つて」学費値上げ問題に臨まれた、当時の宮崎学生部長の活躍を彷彿とさせ、その意氣込みが伝わつてくるような本です。

2003年10月、宮崎先生が「雪乱れ飛ぶ」明大学紛争」を上梓されました。「日大紛争や、東大紛争については、それなりの評価や記録も出版され、社会的に関心も持たれたようですが、明大紛争については、全く忘れ去られようとしています。私たちが情熱を傾け、立場はそれぞれに異なつても、より良い解決を目指して青春の一時期を昇華させた明大紛争を、ただ忘却の彼方に押しありしまつるのは、いかにも残念です。後進に実感を伝えて、大学や社会への警鐘の一助に、その記録を残そうかとおもつていてます」との宮崎先生の「想

ように、学生部長として事にあつた宮崎先生にとつては、私たち以上に「おもい」があるようです。とりわけ、明大学費闘争が「2・2協定」で終息したために、「ボス交」のレッテルが貼られ、否定的にしか評価されないことに對し厭懐たる思いがあり、宮崎先生としては一言いいたいのだと思います。私の中にもそのような気持ちがあります。この提案を受け、一度「2・2協定」についてのシンポジウムの様なものを開催してみたいと思つて、もう一方の当事者である斎藤克彦氏に会うこととしました。義兄にある古賀さん（情况出版）の社長）に仲介の労をとつてもらい、斎藤氏に連絡をしました。当時の連中とばかり、あまり会いたくないとのことでしたが、「君がそんなんに望むなら宮崎先生とは会つてもいい」とのことでしたので、早速宮崎先生と連絡をとり、3人で会うことにしました。1月29日、新宿で会いましたが、宮崎先生の語られる熱い「おもい」にほだされると、斎藤氏も全面的に「資料集」作りに協力していただけることになりました。その席で確認されたことは次の点です。

- ①宮崎先生が中心となつて「明大学費闘争」の資料集を作成する。
- ②斎藤氏も資料作りに協力する… 当時の思いを文章にして資料集に載せる。
- ③米田は主に当時の学生側の資料を集めること。

④年内の完成をめざす。

みなさんにもご協力の程宜しくおねがいします。35年も前のことですので、みなさんの記憶を喚起するために、宮崎先生から送られてきました「明治大学1966-67年学園紛争略年表」を同封します。若し資料となるものをおもちでしたら、私に連絡を下さい」（会報No.4 2001年2月）

この様にして、資料集作りはスタートしました。しかし、ことはよく進みませんでした。

「昨年（2001年）、宮崎先生を含めて3人で会つたのが3回、斎藤氏とはそれに加えて2回打ち合わせをしてきましたので、それを引用しながら説明していくま

たのですが、進捗状況は全くもつて芳しくありません。宮崎先生は頑張つて資料を探し整理されている様ですが、

年にぶんにも35年も前のことのため、学生側の資料が見つかりません。唯一入手できたのは、三一書房の「資

料費闘争の記録」が殆ど残っていない。資料集と言つ形で

よいから、是非記録に残したい」との提案をされまし

た。当時1年生だった私たちにとって鮮烈な体験だった

もの、若干、編集方針の変更をおこないたいと思います。当時の資料の少ないぶんを、当事者の学費闘争とりわけ「2・2協定」にたいする「おもい」を文章にしてもらひ、それで補つていただきたいと思います。具体的には、近い将来に私のこの資料集作りに対する考え方を文章化しますのでそれを読んでみて下さい」（会報No.5 2002年1月）

2002年3月、私が「明大学費闘争の記録」（仮題）を作成への協力を（参照1）、4月 宮崎先生が「お願ひ」（参照2）で、「M66」のメンバー以外の人たちにも資料集作りへの協力を呼び掛けました。また、同時に先ず魄に仲介の労をとつてもらい、斎藤氏に連絡をしました。 「今年中」ということは不可能ですが、それでも、いろいろ、米田君から頂いた資料も含めて資料が集まり、4月10日付けの手紙で宮崎先生からの報告がありました。當時の懐かしい写真も送らせてきましたので、コピーして同封しておきます。この間私は斎藤さんに会つて、再び「2・2協定」に関して何か文章を書いて下さいとお願いしているのですが、一向に埒があきません。当時の詳しい話や、思いの丈は話してくれるのですが、そこから先に進みません。編集者ではないので、人にもものを書きいてもらうように仕向ける術を知りませんが、もう少し粘つてみたいと思います。

私の呼びかけに応え、伊藤英雄君から当時の「アジビ」を中心とした貴重な資料を受け取りました。ありがとう。このことは宮崎先生に話してはありますがあまり詳しくは語らなかったので、人にものを見せてもらひ、その整理が出来てない為、資料そのものは渡しません。年明け早々に宮崎先生にお会いして、直接渡す約束となっています。その時、重信さんから預かっている「2・2協定と私」（参照4）の文章も渡しました。

（第7回総会）について 年が明けないと、会場の予約が出来ませんので、まだ確定ではありませんが、4月の第2か第3土曜日（12日 or 19日）に総会を計画しています。しかし、総会後のイベントの方は決めました。

「学費闘争」についてのシンポジウムを行います。（二度みさんに資料集めに対する協力をお願いするとどうぞ）

ンボジュームを開催したいと思います。当時の学生部長

宮崎先生と全学闘争委員会の主だったメンバー、斎藤さん・中澤さん・大内さん・小森さんなどの討論と云つた様なものを考えていました。どうでしようか、ご協力頂けるでしようか?」と先生に手紙でお願いしたところ

「喜んで出席します。4月12日と19日は、他の用事を入れないよう空けておきます」と快諾を得ました。また、斎藤さんにも電話を入れ承諾を得ました。あと他に誰と誰を呼ぶか、進行はどうするかとかの問題はこれから、みなさんと相談して決めていきたいと思います」(会報No.6 2002年12月)

私としては、学生サイドの原稿・資料集めが遅れていた事態を進展させる為に、シンポジュームの開催を考えた訳です。

「会報(No.6)」で、総会の日程を4月12日又は19日と予告しましたが、シンポジュームのパネラーの都合により、4月26日に変更しました。今回の総会の目玉は、「明大費闘争」についてのシンポジュームになるかと思ひます。宮崎先生は既に、150ページにも及ぶ「雲亂れ飛ぶ」の原稿をば書き上げられ、相当の力の入れようです。斎藤さんも、事実を示すことによって、あらぬ名を晴らしたいと思つてゐるようです。37年前のことですが、当日は、昨日の事のように記憶が蘇り、白熱した討論が期待されます」(会報No.7 2003年3月)

このようにしてシンポジュームは、パネラーに宮崎繁樹(学生部長)・斎藤克彦(全学連委員長)・大内義男(全学闘争委員長)・小森紀男(和泉地区闘争委員長)が決まり、4月26日に向け準備されました。ところが……「出席を約束していた斎藤さんに、2日前の24日、電話ひとつで、ドタキャンされました。実を言いますと、今回のシンポジュームについては、日程・パネラーの人選・参加を呼び掛ける対象者等、全て斎藤さんの意向に沿うように、私としては不本意なこともあります。努力してきました。と言ふのも、「裏切り者」のレッテルを貼られた斎藤さんが、事実を示すことによつて、あらぬ汚名を晴らす最後の機会が、このシンポジュームだと考へ、斎藤さんは是非参加して欲しいと思っていたからです。「宮崎さんの原稿を読んだが、こんな人とは同席できない」と、土壇場でキャンセルしてくる斎藤さんは、一体何を考えているのでしょうか? 私としては、

またしても裏切られたという感じで、後味の悪いシンポジュームになってしまった

とは云え、3人のパネラーをはじめ、参加者全員が加わって白熱した討論を長時間(6時間)にわたり交わし、いくつかの事実も明らかになり、「闘争」の全体像をほぼ掴むことが出来たのではないかと思っています」(会報No.8 2003年7月)

「2003年4月26日、米田隆介君の骨折りで、当時の1年生を中心いて、明治大学リバティーアークの演習室で、明大紛争のシンポジュームが開催され、活況な討議が行われた。筆者も、大内義男君も出席し、記憶の定かでない点や、食い違う点もあったが、本書は、筆者の責任で(その視角からの記述として読んで頂くことにじこ)出版することにした」(『雲乱れ飛ぶ』「あとがき」)

「雲乱れ飛ぶ」は、これまで見てきたよくな経過の中で、宮崎先生が書かれた「明大費闘争」の記録です。私としては、当時の「全学闘争」指導部(就中斎藤克彦さんには「2・2協定」について、その思いの丈を語つて欲しかったのですが、それが果たせず残念です。当初の目的を達成できなかつた無念さが私の中に残りました。加えて、私の協力要請に応えてくれた、伊藤英雄君はじめみなさんに対し、心苦しい思いも残りました。この無念さ、心苦しい思いを少しでも晴らせればとの気持から、この「明大費闘争資料集」を作成することを決めました。